歴史地理学調査報告　第5号　99～120　1991

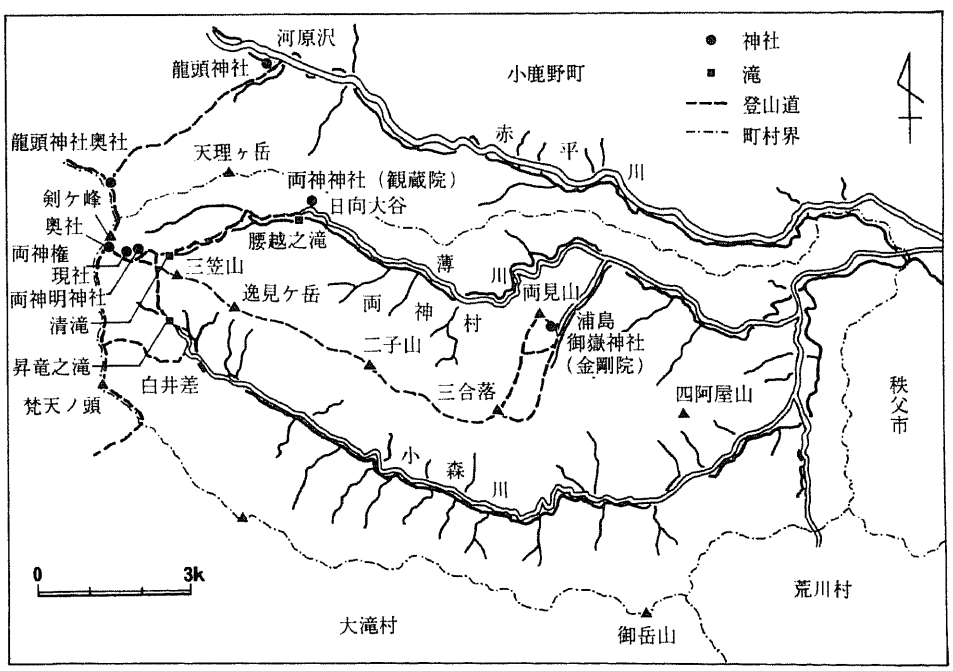
秩父両神村における修験の展開と変質

椿　真智子・城戸　貴子

Ⅰ　はじめに

両神山は秩父山系の西端に位置し，秩父郡両神村と小鹿野町，大滝村との境界をなす（第1図）。秩父古生層のチャート・粘板岩からなる両神山は鋸歯状の独特な山容を呈し，三峰山，武甲山とともに秩父三山のひとつに数えられてきた。秩父盆地から望むことのできる特徴的な山容は，広範囲な地域で山岳信仰の対象として認識されてきたであろうことを示している。山中のいたるところに切り立った岩壁が露出し，のぞき岩と称される絶壁や数多くの滝を有していることから，修験者のかっこうの修行の場となった。標高1,724mの主峰剣ヶ峰から前東岳・東岳・西岳へのびる尾根は，志賀坂峠および群馬県境へと続く。陸上の交通手段を徒歩に頼らざるをえなかった時代には，尾根づたいの山道が頻繁に利用されたであろうことは想像に難くない。両神山周辺は甲州・信州・上州と武蔵国とを結ぶ交通の要所でもあった。また両神山西岳の一部には石英閃緑岩が露出し，大滝村中津川を中心とした鉱山は，戦国時代に武田信玄によって開発された場所である。鉱物資源に富む両神山をめぐり，領主と，山岳地理や各地の情報に詳しい修験者とが結びついたとも考えられる。

薄川と小森川は東西の峡谷を形成し，小鹿野町で赤平川と合流して荒川へと続く。荒川は江戸への重要な河川交通のルートであった。現在，両神村内の主要道はほぼ薄川および小森川の谷に沿って東西に伸び，「耕地」と呼ばれる集落と斜面を利用した畑地が点在する[1]。この地域は生業の多くを焼き畑を主とする畑作，林業，紙漉，養蚕，



第1図　研究対象地域

製炭，狩猟などによってきた。狭小な谷と山地にはさまれ過酷な労働を要する土地条件でありながら，むしろ山間のさまざまな資源利用が可能な地域であったともいえる。両神修験の展開と変質がこうした地域的特色とどのようにかかわってきたのかは非常に興味深い問題である。

秩父盆地は両神山のほか三峰山・武甲山・宝登山など多くの山岳信仰の対象となった山に囲まれている。『新編武蔵風土記稿』によれば近世末には本山派修験241，当山派修験148，羽黒修験39，合計428ヶ寺の修験寺院が存在していた[2]。なかでも三峰神社は近世中期以降，江戸町人の豊かな経済力を背景とした三峰参詣の流行によって隆盛を極め，現在もなお広範囲な信仰圏を有している。一方両神山は，武田氏，北条氏といった有力な戦国武将とかかわり，かつては有力な修験道の拠点かつ信仰の対象であったと考えられるが，現在は比較的信仰圏が限定され近隣社会とのつながりが強い。両神山にかかわる二つの修験寺院「観蔵院」（当山派）と「金剛院」（本山派）は明治以降それぞれ両神神社，御嶽神社と改称し，表面的には修験的性格が失われたかのようにみえる。しかし，両神社がだす御眷属（山犬）に対する信仰は現在も消滅することなく，両神社にかかわる講中は現在も継承され活動が行われている。また，近年まで両神山中において先達に率いられ修行を行う人々がいたこと，「法印」と呼ばれる祈禱師が盛んに活動を行っていたことなどは，形は変わりこそすれ今もなお両神修験が地域社会の中で生きていることを示している。現代においても，かつての両神修験は人々の生産および生活の守護や現世利益といった要請に答えているのである。

従来の修験道研究では，山中での山伏の活動や峰入り修行，修験道の教義や組織あるいは山岳霊場や霞の宗教的空間構造を分析する研究に重点がおかれていた。一方，民俗宗教の研究者を中心に「里修験」がとりあげられ，その機能や役割についても検討がすすみつつある。しかし，明治以降多くの修験が神官や僧侶に復飾したことや史料的制約により，地域社会の中で庶民と修験者たちが実際にどのようなつながりをもっていたのか，地域住民にとって修験道やその背後にある山岳信仰がどのような意味をもっていたのかについては十分に論究されてきたとはいいがたい。両神山の信仰や修験道については，千嶋寿(1879)[3]の論考および両神村史編纂委員会編の両神双書3『両神山』(1989)[4]があり，両神山信仰の歴史や本山派・金剛院と当山派・観蔵院を中心とした両神修験に関する考察が行われている。しかし，両寺院のかなりの史料が最近明らかにされたこともあり，より具体的な検討はこれからという状況である[5]。こうした点をふまえ，本報告は近世以降の両神修験のあり方と活動の一端を明らかにし，両神修験の展開過程が秩父地域の変容や地域的特色といかにかかわってきたのかを探るための予察的考察としたい。

Ⅱ　両神山信仰の展開

両神山に対する原初的な信仰は，農業に必要な水を供給する水分りの神，あるいは山の神として位置づけられてきた。また両神山そのものを「龍」とする山岳即神体観や諏訪信仰とのかかわりについても指摘されている[6]。両神山に対する名称も「両神山（りょうかみさん・りょうかみやま)」，「龍神山（りゅうかみさん)」，「八日見山（ようかみやま)」と多様である[7]。

現在，両神山の里宮としては両神村薄に観蔵院（現・両神神社)，同村浦島に金剛院（現・御嶽神社)，小鹿野町河原沢に龍頭神社の三社が存在する。龍頭神社について本稿ではとくに触れないが，神社縁起にみられる日本武尊伝説，イザナギ・イザナミの祭神，御眷属の貸出を行うこと，旧4月8日の祭日など両神村の二社と共通する点は多い。日本武尊の伝説は，両神山をはじめとして三峰神社，武州御嶽神社，宝登山神社などの縁起に共通してみられる[8]。この共通性がどうして生じたのかについては現段階では解明し難いが，『日本書記』の日本武尊に関する記述が参考となる。すなわち「日本武尊が信濃の山中で道に迷ったと

き，白い狗（狼）が現れ，その案内によってミコトは事なく美濃の国に出ることができた」との記述である。山岳霊場の成立過程を考慮すれば，中世以来，秩父地域に定着し山岳霊場を拠点として勢力拡大をはかった修験者が日本武尊の事蹟を説話化し，寺社の縁起に取り入れることによって山の霊験をさらに高め，寺社の信仰的基盤を強化していったと考えることができる。

三神社から出される山犬の御眷属は，現在も神社と講中とを結びつける重要な要素である。山犬信仰は，飯塚好(1989)[9]によれば秩父地域において近世にはすでにみられた。三峰や両神神社の狛犬は山犬が形どられ，お札には山犬が描かれている（写真１・２）。「三峰神社縁起」には，「山神の使者である山犬（狼）を借りることによって，諸侯は武運を祈り，町人は賊難を防ごうとし，庶民は五穀の成就と猪鹿風などの不時の災難を防ぐことを願った」との記載がある[10]。三峰神社では，享保期に入山した日光法印が山犬信仰を広めたとされるが，両神山の山犬信仰の起源は明らかではない。ただし『新編武蔵風土記稿』[11]の両神山の項には，「この山の神の眷属と称して，火難盗難よけのための山犬を貸し出せること，三峰山などのごとくにて，却って三峰山よりも古く貸し出せるより，此犬を借りるもの，近國及び諸郡の人々年分引きもたえず，詣り来たりて乞ひ求めるに，銭帛を納め，守護札を受て帰れり　両別當により指し出さる守り札少なからねば，その益のあること知んぬべし（後略）」とある。

観蔵院の「八日見山両神宮略縁起」[12]には，「火防盗賊除ノ眷属ハ當山ヨリ出ス毎歳四月八日ヨリ諸人参詣アリ神事無怠事依テ往古ヨリ火除盗賊疫病除御守札出シ来レリ」と記されていた。眷属は，火防・盗賊・疫病に利益があるとしたものである。金剛院が勧化の際に配布したと思われる「永代講中帳」[13]には利益として「火盗水災を攘い厄難病苦を祓除し五穀豊饒養蚕倍盛を守り普萬民快楽のため両部曜を普べ（後略）」とある。さらに観蔵院が作成した「両神山護摩講中帳」[14]にも「火盗水災を攘い厄難病苦を祓除し諸作豊饒を守り普万民快楽のため両部曜を並べ…（中略）…養蚕倍盛護摩供修行専ら衆人を安からしめん」とあり，金剛院の「永代講中帳」と非常に類似した利益が記されていた。これは，火防や盗難避け，疫病避け，五穀豊饒に対する庶民の願いが切実であったことを示している。また養蚕倍盛は近世中期以降の秩父地域における養蚕業の展開を背景としたものであろう。庶民や社会の要求に応じて，近世期における御眷属の利益は多様化していた。

写真１　両神神社の山犬像（平成元年10月撮影）

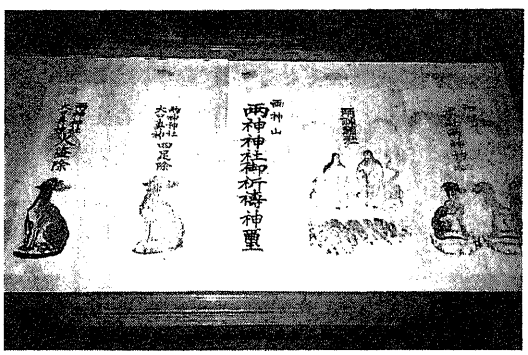


写真２　両神神社のお札（平成元年10月撮影）

現在も秩父地域では，山犬の札や御眷属を，火難・盗難を防ぎ畑地や山地の四足をよけ，さらに養蚕地帯では蚕の敵である鼠を退治してくれるものとして信仰する習俗が広くみとめられる。また，

両神村に残る昔話や伝説には，山犬のたたりや山道の通行に際しての送り犬の話なども伝承されている[15]。

こうした日本武尊伝説や山犬信仰の起源や成立に関する明確な見解は今のところえられていないが，秩父地域において修験道が展開していく過程で成立していった可能性が推測される。地域社会に定着した修験者が，山そのものに対する在来信仰を基盤として新たな宗教要素を加えることにより，一般民衆の心理をつかみ教化をすすめていった結果と考えられる。

Ⅲ　両神修験の系譜と組織

1）両神修験の系譜

両神修験の中心であった観蔵院と金剛院が両神村内に定着した時期を示す史料は確認されていない。しかし，少なくとも中世末期には両神山に修験山伏がかかわっていたと考えられる。近世期，観蔵院は当山派安中天照寺の配下，金剛院は本山派越生山本坊の配下として活動していた。越生（入間郡毛呂山町）の山本坊は，大永6年(1528)の史料[16]によれば，それ以前から秩父六十六郷の熊野参詣先達職をつとめる有力な先達であった。ここではまず観蔵院と金剛院の立地条件をふまえ，近世の両神修験の存在形態について検討する。

（1）観蔵院

観蔵院は薄川上流部の日向大谷に位置し，両神山への主要参詣道の入口に鎮座している。この日向大谷からのルートは現在も登山道として最もよく利用されている。昭和47年以前は出原から日向大谷まで，旧道を徒歩で往来していた。旧道は，観蔵院の手前約100m地点で，奈良尾峠をこえて小鹿野町納宮へ続く峠道と分岐する。納宮には不動明王を祀る不動堂があり，かつては赤平谷から日向大谷を経て両神山へ登拝する参詣道のひとつであった。

両神山頂近くには観蔵院の本社両神明神社が鎮座する。観蔵院はいわば両神山の麓に位置する里宮であり，両神山で修行する先達や講中のための宿坊も兼ねていた。拝殿は両神山頂に向かって建てられ，北側に本殿，西側に宮司宅が隣接する。拝殿の下手には神楽殿があり，現在も神社大祭に神楽が奉納される。観蔵院から20分ほど下った谷にある腰越之滝では，両神山へ登拝する前に先達や行者がみそぎや水行を行った。観蔵院の約200m東の旧道には，「役行者像」「勢至菩薩」「天狗様」を祀る勢至堂が建っている。現所有者は観蔵院の分家で，神仏分離の際に本尊を勢至堂に移した。

観蔵院は，幕末から明治5年(1872)にかけて「両神山金生寺」，明治5年から大正期には「八日見神社」と称し，その後「両神神社」に改称している。由緒書によれば，初代観蔵院は正徳元年(1713)12月22日に入寂した。幕末の火災によりかなりの史料が焼失したが，観蔵院を名乗った最後の2名である両山と両天に関しては，数点の補任状を含む残存史料から断片的に知ることができる（第1表）。両山に関する最初の史料は，宝暦3年(1753)の「伝法阿闍梨前先達」と記載のある史料で，両山は明和4年(1767)には南都超昇寺大先達に同行して「当峰修行証」を受けていた。天保10年(1839)には，観蔵院配下の本明院に出された補任状も残されている。天保12年(1842)に26歳で河原沢村強矢家から養子にはいった両天は，安政3年(1856)に金生寺の寺号および大越家の階級を受けた。補任状は，両山・両天ともに大越家という当山派修験のなかでも高い階級にあったことを示す[17]。また，同年別納触頭役の仮免許を受けた巫子の龍は両天の長女である。聞き取りによれば，幕末から明治中期にかけて，火災で焼失した寺院を再建するため，龍は巫子舞をして神社再建の資金を稼ぐなど活躍した。

（2）金剛院

金剛院は浦島集落の最奥に位置し，その背後には標高746メートルの両見山がひかえている。現在は金剛院まで林道が続き車の通行が可能であるが，昭和40年代まで浦島の中程から金剛院までは急勾配の山道を徒歩で登っていた。金剛院は神仏分離以降，両神山御嶽神社と改称されたが，現在も一般には金剛院という名称で呼ばれている。神

第1表　観蔵院補任状一覧

年　号	西　暦	官　位・階　級	発　給　者	宛　名
寛政2	1790	錦地職	法印甚英(外)	観蔵院
〃		院号職	〃	〃
〃		袈裟	〃	左繕坊
文化8	1811	錦地職	法印賢峰・光海・秀盛	観蔵坊
〃		院号職	〃	〃
〃		権大僧都職	〃	〃
〃		袈裟	〃	左繕坊
〃		応令許可大越家	僧政法院淳覚(外)	観蔵院両山
天保3	1832	薄村当山派別納申渡状	鳳閣寺戒定恵院	観蔵院両山
天保10	1839	山号八日見山免許状	筑後法印恵諦	観蔵院両山
天保10	1839	阿闍梨大越家職	法印仁秀・浄住・覚阿	観蔵院未来
〃		錦地職	〃	観蔵院
〃		院号職	〃	観蔵院
〃		法印定	法印浄住	観蔵院見来
〃		黒衣真綴着用	恵諦	本明院文良
〃		山号塩野山許容状	南都超昇寺 法印彗諦	本明院文良
〃		袈裟院号	南都正大先達超昇寺法印仁秀・浄住・覚阿	本明院文良房
〃		錦地袈裟	〃	本明院
〃		袈裟	〃	正覚房
〃		袈裟職	〃	泉蔵房
〃		袈裟	〃	山本房
〃		袈裟	〃	倉本房
天保14	1843	触頭役免状	鳳閣寺戒定恵院	観蔵院両山
安政3	1856	黒衣着用之	北伊賀守(外)	観蔵院両天
〃		山号寺号許状	僧正法印演隆(外)	〃
〃		応令許可阿闍梨職	〃	〃
〃		応令許可大越家	〃	〃
〃		応令許出世昇進	〃	〃
安政3	1856	別納触頭役仮免状	当山派御役所	神子龍
安政3	1856	触頭役所金生寺役儀申渡状	鳳閣寺戒定恵院	金生寺両天

(『観蔵院文書』両神村役場寄託)

社社殿・拝殿に棟続きで現宮司薄平氏の居宅があり，その向いには神楽殿が建つ。神社の2階はかつては宿坊として使われ，多いときで50人前後が宿泊していた。

金剛院も観蔵院と同様に山頂近くに本社・両神大権現を配し，いわば里宮的存在として機能していた。神社裏手の畑地から両見山へ登山道が続き，両見山の遥拝所からは両神山を望むことができる。両神山への登山ルートは，日向大谷あるいは小森の白井指からが一般的であったが，金剛院史料によれば，慶応期以降両見山から尾根づたいに三合落，逸見ケ岳をへて両神山へいたる山道が開発された[18]。この山道は非常に険しく，山頂の剣ケ峯まで10時間以上を要するため，現在ではほとんど利用されていない。金剛院の奥には不動の滝があり，昭和30年代まで金剛院を訪れた行者や講員が水行やみそぎを行っていた。

金剛院は，史料的にみて，少なくとも17世紀後半には越生・山本坊配下の本山派修験として活動していたようである。金剛院「過去簿」[19]に，

開祖として名前が記されている黒澤左京太夫平景信は，寛正元年(1460)に出生し，永禄11年(1568)に108歳の長命で示寂している。金剛院を名乗った初代法印は，元禄6年(1694)に示寂した梅永で，その後天保9年(1839)示寂の順明まで金剛院の名が継承された。金剛院には現在25通の補任状が残るが，その初見は延宝7年(1680)8月に三山奉行若王子から明学院梅輪に出された2通で，院号および桃地袈裟を許可したものであった（第2表)。

金剛院とかかわる最も著名な修験者は，寛政4年(1792)に御嶽山王滝口を開いた普寛行者である。現在薄平家には，普寛が常用していた木椀・汁茶碗一対と普寛の遺骨が保管されている。天保9年(1839)に示寂した順明は，13歳から普寛の弟子として修行を積み，御嶽山登拝をはじめ高野山や四国霊場巡拝にも従い，普寛とともに御嶽信仰の普及に貢献した。順明は普寛の没後，その意志を継いで御嶽信仰の布教に専念し，79歳までに御嶽山に39回登拝し，78歳の時には普寛入寂の地である本庄に普寛堂を開いている[20]。順明が普寛とともに活躍して以来，金剛院は御嶽信仰との関係を深めていく。浦島の入口に建つ元治2(1865)年「金剛院入口」の石碑には，「両神大権現別当御嶽蔵王大権現」と刻まれていることから，少なくとも幕末には御嶽信仰との関係が強かったと推察される。明治以降，金剛院が御嶽神社として復飾したのもその表れであろう。

2）近世の修験組織

近世期，金剛院と観蔵院のほかにも両神村内に

第2表　金剛院補任状一覧

年　号	西　暦	文　書　名	官位・階級	宛　名
延宝7	1679	三山奉行若王子奉書	院号御免	梅輪
〃		〃	桃地袈裟御免	〃
貞享4	1687	同	大僧都	梅慶
〃		〃	法印御免	〃
元禄3	1690	同	僧都御免	梅空
元禄6	1693	同	院号	梅永
〃		〃	桃地袈裟御免	〃
元文4	1739	同	僧都御免	梅心
〃		〃	院号	〃
〃		〃	袈裟御免	〃
宝歴7	1757	同	金襴地袈裟御免	龍山
天明3	1783	同	権大僧都御免	梅圓
寛政4	1792	同	院号	順道
〃		〃	僧都	〃
〃		〃	桃地袈裟	〃
〃		〃	具諸御免	〃
文化4	1807	同	法印御免	順明
文化8	1811	同	権大僧都御免	順明
文政10	1827	三山奉行若王子奉書	桃地袈裟御免	金剛院付弟寛明
嘉永2	1849	聖護院門跡御教書	金襴地袈裟御免	壽光
嘉永2	1849	三山奉行若王子奉書	院号	壽光
〃		〃	桃地	〃
〃		〃	権大僧都	〃
〃		〃	法印	〃
〃		〃	具諸御免	〃

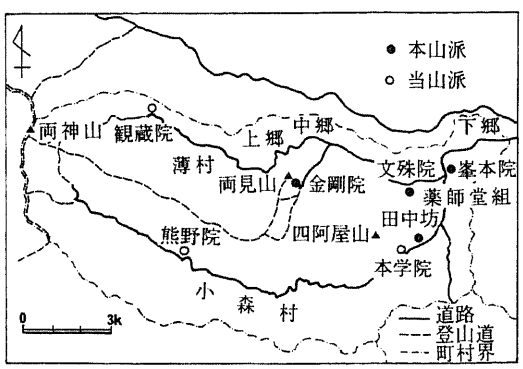
(『金剛院文書』両神村浦島　薄平寿徳氏所蔵)

定着した修験者が存在した。第3表は「薄村明細帳」等に記された山伏の数である。名前の記載があるのは，当山派の観蔵院，本山派の金剛院・文殊院・峯本院であるが，両神村内には少なくとも第2図に示したような里山伏が存在していた。本山派修験の系譜をひく桜本の田中家には，権大僧都職を初めとする文化2年(1805)の補任状5通と，嘉永元年の補任状3通が残されている[21]。田中家の「弘法大尊記」[22]によれば，延文3年(1358)2月初代田中新右衛門が野州足利郡田中村から小森村の四阿屋山麓に定着した。四阿屋山は，天正期に善光寺聖の木喰丹生がいたといわれる山岳修行の場であった。「田中坊」は5代続き，正保2年(1645)・正徳3年(1713)・正徳4年(1714)・享保15年(1731)・寛保3年(1743)にそれぞれ没していた。正保2年10月に80歳で入寂した最初の田中坊は，「田中坊権大僧都四阿法印」と記され，元和2年(1616)7月には大峰山に入峰修行を行っていた。田中坊は本山派ではあるが山本坊の配下ではなく，三峰山観音院の配下であったと考えられる。三峰神社史料の「明和6年聖護院門跡役人達書」[23]には，三峰山霞支配地として薬師堂村・小森村・贄川村・小野原村・古大瀧村・新大瀧村の6ヶ村が書き上げられていた。文殊院については，大塩野の加藤家に補任状7通をはじめとする史料数点が残されている。補任状はすべて享保12年(1728)7月に南都超昇寺大先達より出されたもので，文殊坊法印彦旭・長厳・玄慶に袈裟を任命したもの，文殊院に院号・権大僧都職・錦地職・一僧祇・二僧祇・三僧祇職を与えたものであった。峯本院については，聖護院文書[24]に山本坊配下寺院として「長又村峯本院」との記載がある。

第3表　薄村の修験寺院と山伏数

年　号	西　暦	山伏軒数	人員	本　山　派・当　山　派
明和7	1770	3	3	(記載なし)
天明4	1784	3	3	文殊院　金剛院・観蔵院
天明8	1788	—	6	(記載なし)
寛政12	1800	—	6	(記載なし)
嘉永5	1852	4	5	文殊院　金剛院　峯本院・観蔵院

(「薄村明細帳」『出浦家文書』にもとづき作成)



第2図　両神村における修験寺院の分布

一方，当山派の修験については，観蔵院の嘉永2年(1850)・嘉永4年(1852)「当山派修験神子家族人別御改帳」[25]によって，触頭であった観蔵院が統括した山伏を把握することができる。薄村上郷に観蔵院，中郷に宝泉院，下郷に袈裟筋の本明院がおり，小森村には玉泉坊・本学院・熊野院の3名がいた。嘉永4年(1852)には，本学院が病死のため無住となり，宝泉院が兼帯している。同史料によれば，嘉永2年(1850)に観蔵院は4人家族で，観蔵院両山が63歳，二代目の養子胎蔵院両傳が36歳，その妻で神子代々連元の薄内34歳，娘リウ10歳であった。両山と両傳は「超昇寺同行」で旦那寺には属さないが，薄内とリウは薄村の禅宗寺院岩松院の旦那となっている。両山と両天，神子の薄内は無役であるが，そのほかの修験者は勤め役でありいわゆる百姓山伏であった。

両神村では，観蔵院や金剛院が集落から離れて位置していたのに対し，その配下の山伏はむしろ両神村下郷から薬師堂，四阿屋山麓の比較的まとまった集落に居住していた。このことから，観蔵院や金剛院がいわば御師的な活動を主としていたのに対し，その配下の山伏は周辺住民とより密接な関係をもちつつ活動する里修験的性格が強かったものと推測される。

Ⅳ　両神修験の地域的活動

1）近世修験の在村活動

修験寺院，とりわけ地域社会の中で活動した里修験は，庶民のさまざまな要求に答えるべく加持祈禱をし，講中の先達あるいは鎮守や小祠の別当として，さらに医術や医薬をもって病気をなおす民間医として，幅広い活動を行っていたと考えられる。ここでは近世の両神村における修験者の活動や果たした役割について，修験者のかかわり方を村・家・個人の３つのレベルにわけて検討する。

①村と修験者

まず薄村中郷の名主であった出浦家文書の「薄村入用夫銭帳」[26]にもとづき，薄村が修験者に依頼した村行事の内容を示す（第４表）。同帳は享和２年(1802)以降残存するが，嘉永３年(1850)以前は記載様式が異なり，修験とのかかわりについての記載がない。修験者は，村行事の中でも雨乞いや虫送り，疫病避けなどを依頼され祈禱を行っていた。祈禱に要する紙・神酒・線香・色紙代などの諸費用や，修験者１人につき100文から200文におよぶ布施はすべて村が負担した。修験者は，社会生活のとりわけ不測の事態に対してその験力が要請されたといえる。聞き取りによれば，雨乞いは両神村において昭和30年代まで行われており，法印による祈禱のほか，日向大谷の腰越之滝や白井指の昇龍之滝において「お水もらい」の行事が行われていた[27]。

第４表　薄村において修験がかかわる村行事

年　号	西　暦	修験者がかかわる行事
嘉永３	1850	去酉年秋雨天ニ而天気祭り祈禱
嘉永５	1852	去亥年六月中旱魃ニ付雨乞
嘉永６	1853	村中風祭り
嘉永７	1854	村諸作虫付候ニ付虫送り 旱損ニ付雨乞
安政２	1855	村内之もの流行風相煩村祈禱
安政５	1858	厄病風祭り
文久１	1861	干（旱）拔ニ付雨乞
文久２	1862	旱損ニ付雨乞
文久３	1863	村中流行はしか送り

（「薄村入用夫銭帳」『出浦家文書』にもとづき作成）

村方から修験者へ報酬が支払われた一方で，近世末の両神山への講中や参詣者の増加は村方へも経済的利潤をもたらしたようである。慶応２年(1866)の観蔵院と金剛院の出入りにかかわる議定書[28]には「後年参詣群集繁栄候，賽銭之内参詣人千人付金三両之割合ヲ以　年々御村方江差出可申候筈」とあり，神社への賽銭の一定額が村方へ納められていたことが示されている。

このほか修験者は村や各集落の鎮守の別当あるいは神官に代わる者としても活動した。嘉永５年(1851)「薄村差出明細帳」によれば，薄村には神社が８社存在していたが，社家として記載されていたのは御霊神社の津守のみであった。丹生社の別当は法養寺，両神神社の別当は観蔵院と金剛院であり，残りの５社は地主持ちとある。したがって修験者が各集落の祭礼や行事に際して祈禱やおはらいを担当していたことは十分推測される。現在も各集落の祭礼やお日待ちなどには両神神社（観蔵院）や御嶽神社（金剛院）の神主がかかわっている。

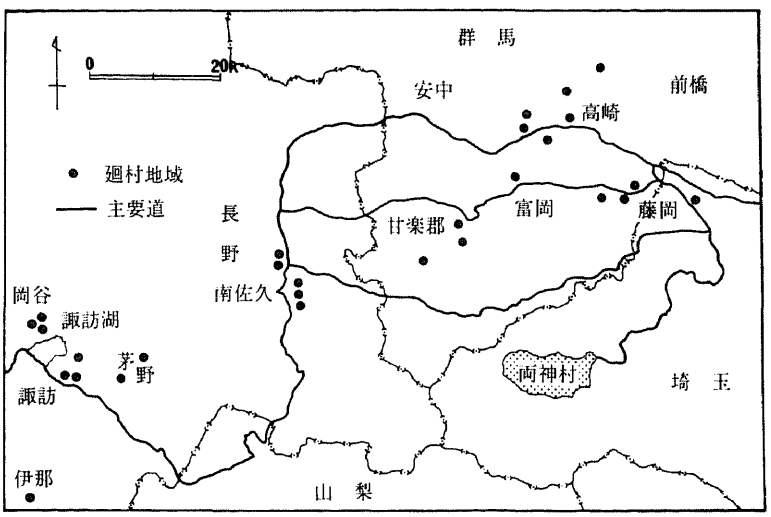
②家と修験者

聞き取りによれば，両神村では第二次世界大戦後もしばしば「法印」と呼ばれる祈禱師が各家をまわり祈禱や病気なおしを行っていた。法印は，観蔵院や金剛院の宮司を指す場合もあったが，それ以外に個人的に修行を積み祈禱や病気なおしなどを行う法印も存在していた。法印が定期的に廻壇して行なう主な活動は，３～４月の農耕祈願祭としての「春祈禱」，養蚕倍盛にかかわる「蚕祈禱」，無病息災・家内安全を祈願する「家祈禱」などであった。「春祈禱」や「蚕祈禱」は両神村において近年まで行われており，神社の宮司や法印が各家をまわり氏神や神棚の前で祈禱を行った。これらはいずれも家レベルで生産の守護や家内安全などを祈願するものといえよう。

同様に近世期においても，修験者は特定の地域や家を廻壇し祈禱や布教をして歩いた。金剛院文書には，断片的ではあるが近世末に金剛院がかか

わっていた地域を示す史料が残されている。第3図には，慶応2年(1866)「諏訪祈禱日記」と「八日見山奉納金請取帳」(年不詳)にもとづき，薄壽光が廻村した地域を示した。「諏訪祈禱日記」によれば，廻村は8月から9月にかけて行われ，諏訪市および岡谷市と佐久郡，伊那郡の村名が記載されていた。金剛院は寛政期以降御嶽信仰に傾倒していくことから，この廻村範囲は，両神村から小鹿野町を経て信州街道で木曾御嶽にいたるルートに沿って分布していたと解釈できる。同史料中の「預ケ物覚」には金銭とともに「御犬十枚」「御草二千ば」の記載があり，また収入として「御犬様大札二拾八　中札二拾壱　小札三拾壱」とある。これは壽光が廻村の際に，古い御眷属を預かり，また新たに山犬の札を配っていたこと，薬草なども受けていたことを示している。また第5表は，「八日見山奉納金請取帳」に記載のある両神山内に奉納された石仏等の代金受取り記録を示した。同史料は，壽光の記録であることおよび史料中の記載から，慶応期前後に2年にわたって記録されたものと考えられる。2月に本庄宿から始まり，3～4月にかけて安中市・高崎市周辺，12月に甘楽郡南牧村・下仁田町，翌3～4月に安中市・藤岡市，10～11月に富岡市・北佐久郡を訪れている。奉納物は，普寛行者や一心行者などの行者像，修験との関係が強い不動明王や大日如来像，そのほか武尊大権現・相馬大権現など非常に多様である。また奉納金額は1両から最高13両までとかなり高額であった。史料中の緑野郡中大塚村の宗八が奉納した「三宝荒神」と，安中の下秋間村酒造蔵が奉納した「刀利天」は現在も両神山中に現存している。三宝荒神には，「上州緑野郡中大塚□総中　慶応三年晩秋　上州緑野郡中大塚□総中世話人小林外」および御嶽講の印が刻まれ，中大塚村の御嶽講世話人と複数の講員によって奉納されたことがわかる。一方，刀利天は「上州碓井郡大先達天照寺　下秋間村講元中嶋酒造蔵」とあり，観蔵院の中本山であった天照寺と下秋間村の酒造を営む講元によって奉納されていた。

一方の観蔵院も廻村活動を行っていたと思われるが，具体的状況については史料的制約から明らかにし難い。ただし近世末に観蔵院と関わっていた講中については，天保14年「八日見山諸国講中世話人連名帳」により把握することが可能である

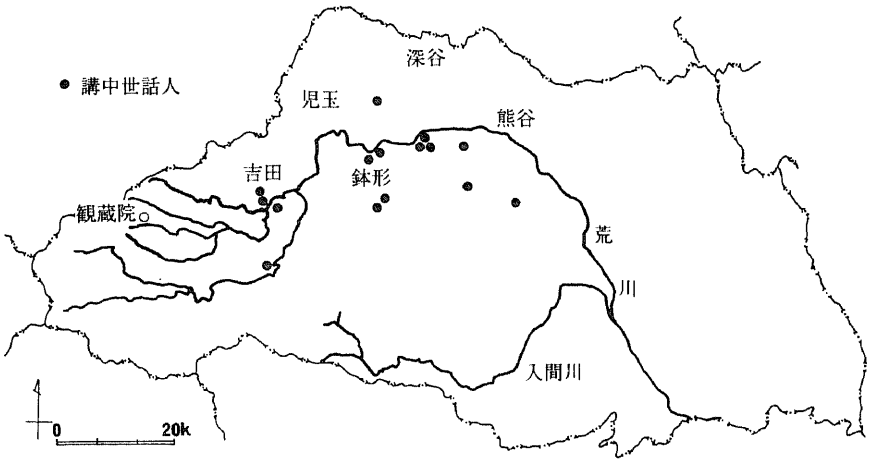


第3図　金剛院の勧化廻村地域
(慶応2年「諏訪祈禱日記」・年不詳「八日見山奉納金請取帳　壽光扣」『金剛院文書』にもとづき作成)

第5表　金剛院への奉納金一覧

月　日	奉納金額	奉納物	廻村場所	奉納者
2　2	金10両	立石壱本	本庄宿	根岸源之丞 清水善兵衛
	金8両	普寛行者	安中宿	三枡屋吉五郎
2	金6両2歩		和田山村	松本定八 同　久米三郎
2	金5両2歩	蚕神	引間村	新谷弥蔵 同　松五郎
3　17		武尊大権現	釼崎村	桜井金五 和十
3　18	金6両3歩	相馬大権現		金古惣兵衛
	金3両	太々神楽修行	野殿村	講元長右衛門 中屋利善松
4　9	金4両2歩	大日如来	和田山村	松本定八郎
寅年				
4	金10両	阿留口天狗	多比良村	(松田講中) 酒井万吉 幾右衛門 勝四郎
12	金5両	石尊大権現	新光寺村	(宮本講) 治助 久治郎
12	金8両		甘楽郡 南牧村 口向村	丸川半兵衛
12	金10両	東照大権現	下仁田村 上町	山口和助 高野太右衛門
12	金12両	弁才天	青倉村	林治郎
12	金12両	不動明王	高崎田町	穀屋勇口
	金10両	一心行者	寄居	武蔵屋伝蔵
3　28	金10両	刀利天	安中在 下秋間村	講元　酒造蔵
		三宝荒神	上州 中大塚村	講元　宗八
4　1	金7両	大江大権現	鮎川村	講元　光蔵
10　15	金9両		信州佐久郡 高町	大楽院 彦左衛門
11　15	金7両	岩戸明神 八幡宮	上州黒川村 (佐久郡宿岩村)	熊五郎 阿部源右衛門 仁兵衛
10　20	金1両		塩名田宿	儀右衛門
	金13両2歩	中央不動尊	矢那瀬	南幾右衛門
巳				
5　1		御嶽権現		(横濱講中) 行者本龍院 講元　大阪屋庄蔵 世話人伏見屋亀治郎 〃　青木屋国蔵 〃　大田屋秀治郎 〃　武蔵屋平三郎

(年不詳「八日見山奉納金請取帳・壽光代扣」『金剛院文書』にもとづき作成)



第4図　観蔵院にかかわる講中世話人の分布（天保14年）
（天保14年「八日見山　諸国講中世話人連名帳」『観蔵院文書』にもとづき作成）

（第4図）。同史料には1村につき1～3人の世話人の氏名が記載されていた。その範囲は秩父郡をはじめとして，児玉・大里・男衾・比企・児玉郡の25箇村に広がっていた。観蔵院は，現在の秩父市から東松山市周辺にかけての荒川流域を中心に活動していたといえる。各村ごとに世話人が存在することから，地縁的に結びついた講中であったと考えられる。

③個人とのかかわり

修験者は個人の日常生活や人生儀礼，治病，除災などにも大きく関わっていた。現在，観蔵院に「義経兵法虎之巻相傳」，金剛院には「鞍馬山毘沙門天尊王兵法虎之巻之大事」と題された巻物が残されている。内容はほとんど同じで，1～52番までの法の施し方および説明が記載されている。52の法は内容から兵法，人間関係，日常生活，病気・医薬などに分類できる[29]。なかでも人間関係や生活に関する法が半分以上を占め，修験者が人間の日常生活や精神的側面に深くかかわっていたことがわかる。病気・医薬に関しては，具体的な治療方法というよりも「護符」が大半を占めているが，祈禱や精神的なカウンセリング等によって個人の悩みに対応していたと考えられる。また金剛院では薬草などの施薬も行っていた。明治2年(1869)には壽光が文部省宛に「百草」の売薬願書を提出している。同史料によれば「百草」は8種の薬草からなり，元価の合計銀25匁9分3厘が約2倍の銀51匁で売買されていた。

このほか修験者の重要な活動として，狐やオーサキなどの憑きものおとしがあった。観蔵院には天保5年(1834)の狐つきの史料が残っている。これは憑きものおとしを行うため観蔵院が妻恋神社から受けたもので，「野狐汝武州秩父郡上薄出原村，五右衛門江執着為悩趣何有意恨歟速可退散，若於相背者関東國々之栖可差構者也依テ神勅如件　関東総司稲荷本宮　妻恋神社　天保五年甲午年　神宮觸頭神主　斉部宿禰守部」とある。聞き取りによれば，両神村では昭和30年代まで狐やオーサキ憑きがよくみられた。狐やオーサキに憑かれた場合は，法印を呼び祈禱や四方堅めなどがよく行われた。

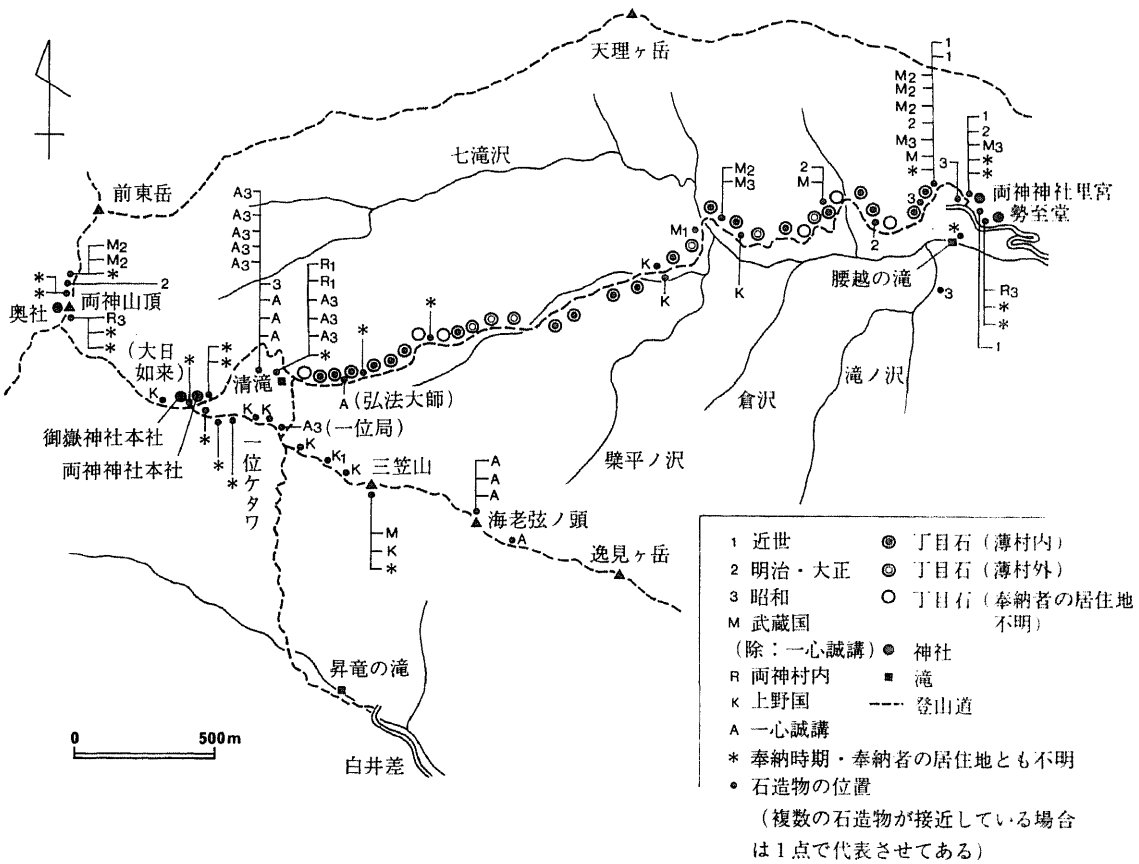
2）両神山内の石造物にみる両神修験の展開

ここでは，両神山に残る石仏や石塔・石碑の形態や奉納者，年代などを手がかりに，両神信仰をささえた地域や講中について検討する。両神山に残る石造物の特色は，役の行者・不動明王・大日如来像・三十六童子碑（丁目石）など修験的色彩が濃いこと，普寛・覚明・一心行者像など御嶽信仰の影響がみられることである。第5図には，両

神村史編纂委員会の調査にもとづき，両神山内の石造物を奉納年代と奉納者の居住地別に示した。

観蔵院から清滝までの参道には36の丁目石がおかれている。丁目石には不動明王の眷属である三十六童子が刻まれているが，そのうち3・9・28・29・36丁目石の5体は現在欠損および遺失の状況にある。丁目石は，高さ54～62センチ，横17～20センチ，奥行き12～17センチの切り石で，19丁目石を除きほぼ大きさは統一されている。正面には童子の名前と奉納者の集落名・氏名が刻まれている。集落名の判読可能な28体についてみると，5体を除く23体は旧薄村内の集落であった。奉納者が多いのは出原で4体，そのほか薬師堂3体，大平・柏沢・竹平・浦島がそれぞれ2体となっている。薄村以外では，小鹿野町内が5体，寄居町内が1体であった。奉納および建立時期は，形状がほぼ同じこと，および奉納者の氏名と年齢を検討した結果から，安政～慶応期と推測される。丁目石の奉納は，近世末に両神山が周辺住民によって山岳霊場として整備されたこと，観蔵院から清滝への参道が両神登山の主要ルートであったことを示している。

「一位ケタワ」は，両神山が女人禁制であった頃，禁を破って入山したイチコ（巫子）が果てた



第5図　両神山内における石造物の奉納時期別ならびに奉納者の居住地別分布
注）数字が石造物の奉納時期，アルファベットが奉納者の居住地を示す。ただし数字のみ，もしくはアルファベットのみの表示は，もう一方の属性が不明であることを意味する。
（両神村史編纂委員会による調査カードにもとづき作成）

場所，あるいは山の神の怒りにふれた巫子が石にされてしまった場所との伝承があり，杉の大木の根元には巫子を哀れむ村人が建てたといわれる墓石がある。他の山岳霊場でも同様の伝承はみられるが[30]，その多くは女人結界の場所を示している。両神山も大正初期までは女人禁制であったことから，一位ケタワが結界として機能していたとも考えられる。

両神山頂近くには，観蔵院の本社「両神明神社」が東向きに，金剛院の本社「両神権現社」が南向きに近接して鎮座している。両社ともに旧薄および白井指村の鎮守としてイザナギ・イザナミの二神を祀る。どちらの神社の起源が古いかについては判断の材料を欠くが，「新編武蔵風土記稿」には，両神権現社の方が新しく見えるとの記載があった。修験道の根本である大日如来は，現在両神権現社奥に安置されているが，第二次世界大戦前までは山頂部に祀られていた。現在山頂近くには，明治2年(1869)に太元講が奉納した「八海山国狭槌淳尊」「御嶽山国常立尊」「三笠山豊斟淳尊」の三尊碑があるが，これは明らかに御嶽信仰の影響を示している。太元講は，文化3年に金剛院順明によって現在の木曾福島町を中心に組織されたもので，現存する御嶽講の中では江戸の高砂講とならび最も古い。

腰越之滝，清滝，昇龍之滝には不動明王が多く祀られている。32丁目石の横には弘法大師伝説にまつわる弘法の井戸があり，弘法大師像が祀られている。

最も古いことが確認できる石造物は，観蔵院前に祀られている享保10年(1725)「奉　月まち日まち」供養塔である。同様の石塔が6体あるが判読できるのは1体のみであった。それ以降は文政2年(1819)のものまで確認できない。近世末に奉納された石造物は，両神神社から一丁目石にかけてと，清滝周辺に分布している。清滝の上に祀られた「日本武尊」は，慶応2年(1866)に両神村内の下和田・渡戸講中が，不動明王は天保12年(1841)に柏沢の7名が奉納していた。丁目石ともあわせて，近世末，両神村内の住民が盛んに両神山へ石造物を建立している。これは，両神修験の活動や庶民の両神信仰が活発になっていたことを示している。奉納年代が集中するのは，近世末から明治初期，明治30～40年代，昭和30～40年代の3時期である。とりわけ昭和33～35年の3年間には一心誠講の関係者によって10体もの石像が奉納されていた。清滝周辺の昭和期以降の石造物は，ほとんど一心誠講によるものである。聞き取りによれば，一心誠講は石像物の奉納や両神参詣にあたり両神村内へかなりの経済利潤を残していったといわれる。

講中名が記載されている石造物41体のうち，一心誠講の奉納が18体と圧倒的に多い（第6表）。そのほか鉢形の開運講社や長瀞の太元講などを除けば，群馬県の講中の名が多くみとめられる。奉納場所も，群馬の講中は一位のケタワから三笠山にかけてに集中している。聞き取りによれば，両神登山道は弘法の井戸から二手に分かれ，観蔵院方は清滝を経て，金剛院方は三笠山を経て本社へ登拝するコースをとっていた。群馬の講中の多くは金剛院との関係が深いことから，三笠山を経て登るコースをとっていたためと解釈できる。一方，一心誠講は観蔵院との関係が強いが，清滝周辺と

第6表　両神山内の石造物奉納講中

講中名	所在地	奉納数
一心誠講	東京都昭島市	18
開運講社	寄居町鉢形	5
人山講	群馬県碓井郡松井田町	3
太元講	秩父郡長瀞町野上	2
普寛元講社	不　明	2
譲原講	群馬県多野郡鬼石町	2
清信講	群馬県藤岡市	1
中本伏講	秩父郡日野沢村	1
安中講	群馬県安中市	1
三笠講	群馬県碓井郡	1
宮本講	群馬県	1
鮎川講	群馬県藤岡市	1
品沢講	秩父郡	1
皆帰講	東京都築地	1

（両神村史編纂委員会による調査カードにもとづき作成）
注）両神山内の神仏像・記念碑等83体のうち、講中名の記載があるもののみについて示した。

三笠山周辺ともに奉納していることから，両方のコースを利用していたと考えられる。

石造物の奉納者は，おおよそ両神村から寄居町にかけての荒川周辺と，群馬県の安中および藤岡市周辺，東京都の昭島および府中，築地などの出身者であった。長瀞・寄居町周辺と東京都の昭島および府中は観蔵院とかかわる講中および信者であり，群馬県と江戸築地は金剛院方とかかわる講中および信者である。

両神山内に奉納された石造物は非常に多様であるが，地形などの自然条件や登拝ルートと関わり，全体としてひとつの宗教空間を創出している。同時に既存の両神信仰と近世末以来の御嶽信仰とが混在する重層的空間をも構成していた。

V　両神修験の現況と講中の活動

1）両神修験の現況

明治の神仏分離以降，全国的に修験者が神職に転じ存立基盤を失っていくなかで，両神修験も存在形態を変化させていった。両神山も近年では山岳信仰の対象としてよりも，むしろ登山やハイキングの場として親しまれている。昭和20年代以降登山道や村内道の整備等により登山者が増加する一方で，昭和40年代以降は，信仰を基盤とした登拝を行う講中や信者が減少していった。ここでは両神社および講中の組織や活動の現況を明らかにし，両神修験がいかに変質をとげてきたのかについて考察する。

（1）観蔵院

観蔵院は，明治5年(1872)以降八日見神社となり，その後大正期には現在の両神神社と改称された。明治以前から宿坊として機能していたが，昭和52年(1977)に「ふたがみ山荘」として新たに民宿経営を開始した。現在，日向大谷には2軒の民宿があり，一方の「両神山荘」も昭和51年より経営を開始している。両神山をめぐる観光化の中で，昭和27年(1952)には両神村観光協会主催の両神山山開きが開始された。当初は5月1日であったが，昭和55年以降は両神神社の祭日に合わせ，観光宣伝もかねて秩父地域で最も早い4月18日に行われることとなった。

両神神社で現在行われている年中行事は，1月元旦祭，2月節分祭，4月18日の例大祭および両神山の開山式，9月各集落の祭礼である。最も多くの人でにぎわうのは4月18日である。開山式は，昭和50年頃までは関係者と宮司が剣ヶ峯の奥社まで行き安全祈願を行ったが，現在は両神神社の里宮で行われている。

神社祭礼では，宮司が1ヶ月前から準備を行い，前日に氏子の当番がお旗立てや神社の幕はり，掃除，料理の準備などを行う。祭礼当日は午前8時より講中の受付を行い，御眷属の貸出が行われるが，祭礼当日以外の日に御眷属のとりかえにくる講中もある。たとえば小鹿野講は6月，寄居講は10月である。なかには遠方のため郵送で送る人もいるが，8割方は祭礼当日に訪れる。御眷属は，お犬替えをしたあと神前にて宮司が祈禱し，改めて代参者に渡される。その間，参詣者は宿坊で酒肴の接待をうける。第二次世界大戦前は，前日に参拝し神社で一晩お籠りをする代参者が多く，昭和30年代までは最も多い時で1日40～50人が宿坊に泊まった。近年は交通条件が改善され，大半の参詣者が車で訪れるため宿泊する人はほとんどいない。

神楽殿では柏沢の住民より太々神楽が奉納される。昭和22年(1947)に神楽の道具が台風で破損した際，観蔵院が立て直しに協力したことから，神楽が奉納されることとなった[31]。

9月には小倉・隼人・日向大谷で行う甘酒祭に宮司が出向き，祈禱を行う。両神神社の氏子は薄の日陰から日向大谷までの範囲で，第二次世界大戦前までは約50戸であったが，現在は約38戸となった。氏子総代は大神楽の黒沢家が世襲でつとめている。

（2）金剛院

普寛の弟子となった順明以来，御嶽信仰とのかかわりを強めた金剛院は，明治以降御嶽神社となり，順明の跡を継いだ壽光は慶応2年(1866)に両神山頂へ御嶽社を勧請した（写真3）。壽光は，

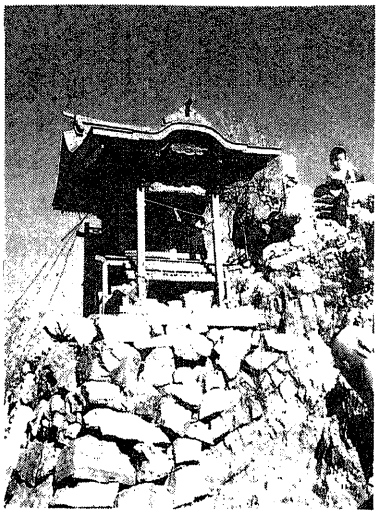


写真３　両神山頂の御嶽神社（奥社）
（平成元年10月撮影）

嘉永２年(1849)に「金欄地袈裟」「院号」「桃地」「権大僧都」「法印」の補任を受けており，本山派修験として活躍した。慶応２年(1866)に浦島から両見山，三合落，辺見ヶ岳，三笠山をへて両神山頂へいたるルートを開拓したことも大きな事業の１つであった。これらは，壽光が順明の偉功を継承し金剛院を新たに御嶽神社として再興しようとしたことを示している。

現在の金剛院の年中行事は，元旦祭，節分祭，５月の例大祭である。例大祭は以前は５月８日に行われていたが，祝日を利用し５日に変更された。祭礼の２日前には宮司が両神山頂の奥社に切りはらいを行いながら参詣し，一晩本社に参籠する。祭りの前日は，神社境内の清掃，切り払い，料理などを薄平家の家族および親戚の人たちで行う。祭礼当日は，祭事のあと講元が玉串をあげ，参詣者は御眷属の交換やお札をうけたのち直会となる。また昭和52年(1977)までは浦島の住民により神楽殿にて神代神楽が奉納されたが，現在は行われていない。金剛院は浦島をはじめとする近隣地域との関係よりも，むしろ遠方の御嶽講とのつながりが強い。

平成２年の例大祭では，神社境内で遠方から訪れた御嶽行者によって柴燈護摩供養が行われた

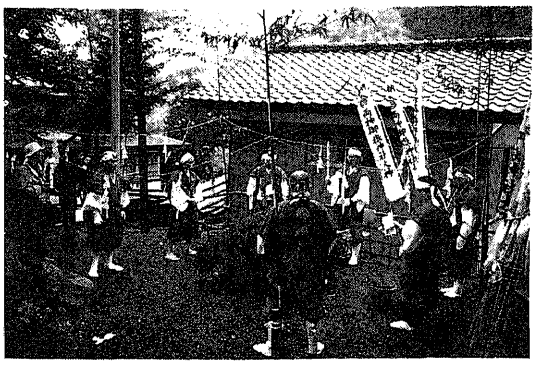


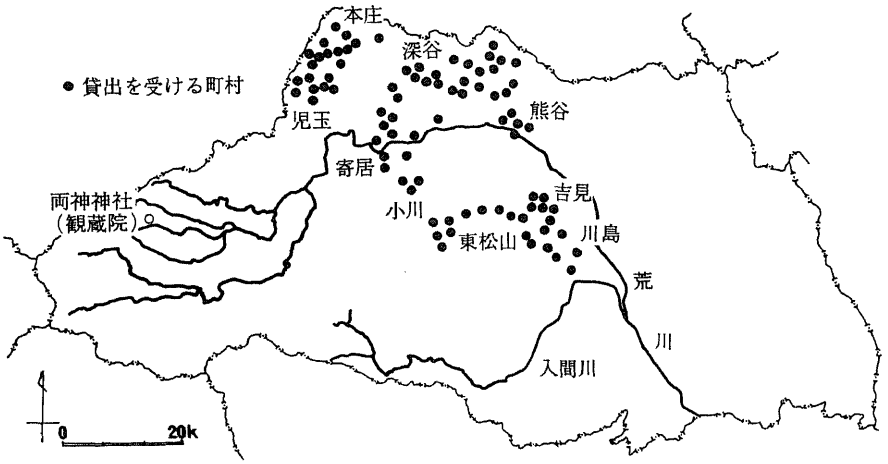
写真４　御嶽神社大祭における護摩供養
（平成２年５月撮影）

（写真４）。これは例年のことではないが，熱心な御嶽行者の希望で行うことになった。近年，祭礼の規模も縮小傾向にあっただけに，神社の経営方針が新たに模索されている。

２）講中の活動

（１）観蔵院の講中

観蔵院にかかわる講中のうち，現在その活動が確認できるのは一心誠講（渡辺講），小関講，小鹿野講，寄居講，横瀬講，両神講である。また一人講，五人講，八人講と称される講が，両神村をはじめ秩父・児玉・大里・比企郡周辺に存在し，御眷属の貸出を受けている。聞き取りによれば，御眷属の貸出は昭和30年代までは600人程が受けていたが，現在はおよそ200人に減少してしまった。第６図には，大正３・４年「八日見神社御眷属貸出帳」による観蔵院の眷属貸出地域を示した。これによれば観蔵院は，大里・比企・児玉郡の91箇村におよぶ町村へ眷属の貸出を行っていた。同史料には秩父郡内の町村が記載されていないことから，眷属貸出地域のすべてを網羅しているとは考えにくいが，少なくとも３郡に関してはすべての貸出町村と捉えてよいであろう。天保14年(1843)の講中世話人の分布と比較すると，本庄・深谷市周辺と吉見・川島町周辺の町村が増加している。分布は児玉町から本庄市周辺と，寄居町から深谷・熊谷市方面にかけて，寄居町から小川町を経て東松山・川島町方面にかけての３地域にわ



第6図　両神神社の御眷属貸出地域
（観蔵院文書大正3，4年「八日見神社御眷属貸出帳」『観蔵院文書』にもとづき作成）

かれる。おそらく観蔵院は，寄居まで秩父往還を荒川沿いに下り，寄居を中心として本庄へは児玉往還あるいは途中長瀞から峠ごえで，熊谷宿までは秩父往還を，松山宿までは児玉往還を経由して村々を廻村したと推測される。聞き取りによれば，両神神社の先代の宮司は，第2次世界大戦前までは寄居町周辺まで布教に赴いていた。

観蔵院の講中は，その性格から2つに分類できる。一つは，特殊な能力を有する先達を中心に組織され，本格的な山入り修行や祈禱・病気治しなどを行う修験的要素の強い講中である。もう一方は，比較的限定された地域の住民が主体となって組織・運営し継承してきた講で，多くは近世末に成立したと考えられる。前者の代表が一心誠講（渡辺講）や小関講であり，後者は小鹿野講，寄居講，横瀬講，両神講といった地縁的に組織された講である。ここでは，それぞれの講中の成立や組織，活動内容についてふれ，その特色について検討する。なお一心誠講（渡辺講）については未調査のため主として『両神山』の記述による[32]。

①一心誠講（渡辺講）

東京都昭島市に住む渡辺ひさ氏を中心に組織された講中で，両神山内に最も多くの石像を残した。大正3年(1914)に初めて両神山登拝を行っている。それまで両神山は女人禁制の山であったが，これ以降女性の両神登山が行われるようになった。1回の参加人員はおよそ30名で，本社に2泊して行を行った。渡辺氏は昭和35年頃までは定期的に入山していたが，その後先達の後継者もなく，講員による両神山登拝などはほとんど行わなくなった。ただし現在も両神神社から御眷属の貸出は受けている。

②小関講

先達小関益夫氏を中心に結成された講で，構成員は小鹿野町住民が主体である。小関氏はもともと岡山県備前市の出身であったが，若い頃大病を患った際に夢の中で「両神山へいって修行せよ」とのお告げを聞き，両神山で修行することとなった。昭和28年(1953)から昭和55年(1980)頃まで小鹿野町に在住し，漢方薬をほどこすなど病気治しを行い，多くの信者を集めた。しばしば1人で両神山に籠り断食などの行を行ったが，5月15日と10月15日には信者を，多いときで50～60人つれて両神山に入山した。講中山入りの際は，夕刻観蔵院に着き，夜は宮司とともに勤行をし，翌朝4時に起床して腰越之滝でみそぎをする。7時に神社を出発，途中清滝でもみそぎをしたのち産泰尾根を通って本社へむかう。夕刻から薪を集めて火を焚き，本社で一晩籠り，小関氏が神よせを行った。神の託宣は，たとえば「その年にどんな病気がは

やるか」「どんな薬をつくったらよいか」といった内容が多かった。山入りのほか，5月30日には小鹿野町伊豆沢の川原で火渡りの行，6月30日と11月30日には「ちのわくぐり」，12月冬至には湯加持祈禱を行っていた。

小関講は典型的な先達主導型の講中であり，小関氏から病気治しなどの利益を受けた信者を中心に組織されていた。先達と講員とが個人的な関係で強く結びついていたといってよいであろう。小関氏亡きあと後継者はなく，現在の講中の活動は4月の神社大祭に御眷属の貸出をうけるのみとなった。

③小鹿野講

正式名称は，両神山御眷属拝借代参講である。およそ70～80年前に，小鹿野町の旅館経営者を中心とした5，6人が発起人となって講が結成された。結成のきっかけは，大正期に小鹿野町で火事があった際，御眷属のあった家だけは焼けなかったためといわれている。当初は100人講をめざし，5人1組の5人講を単位として組織し，地縁・血縁関係や知合いの間で広めていった。現在の講員は105名（21班）で小鹿野町2丁目が中心であり，そのほかは原町，春日町，腰の根の数講で組織されている。新規の講員募集により一人講として個人で加入している人もいる。この講中は，サービス業や商店経営を行う非農家の多い点が特色で，御眷属のおもな利益は火防・盗難避けであった。6月に5人講の代表が両神神社に代参し，前もって届けておいた御眷属を受け取り，祭事をすませたあと帰って懇親会をひらく。小鹿野講が組織されたのは大正期であるが，講発足の契機からおそらくそれ以前から御眷属の貸出を受ける家があったと推測される。こうした地縁的に組織された講は，児玉町や寄居町，横瀬町などにも存在するが，そのなかでは現在小鹿野講が最も規模が大きく，組織的にまとまっている。また両神山の清滝小屋は，大正期に小鹿野講が参籠所として建てたものである。

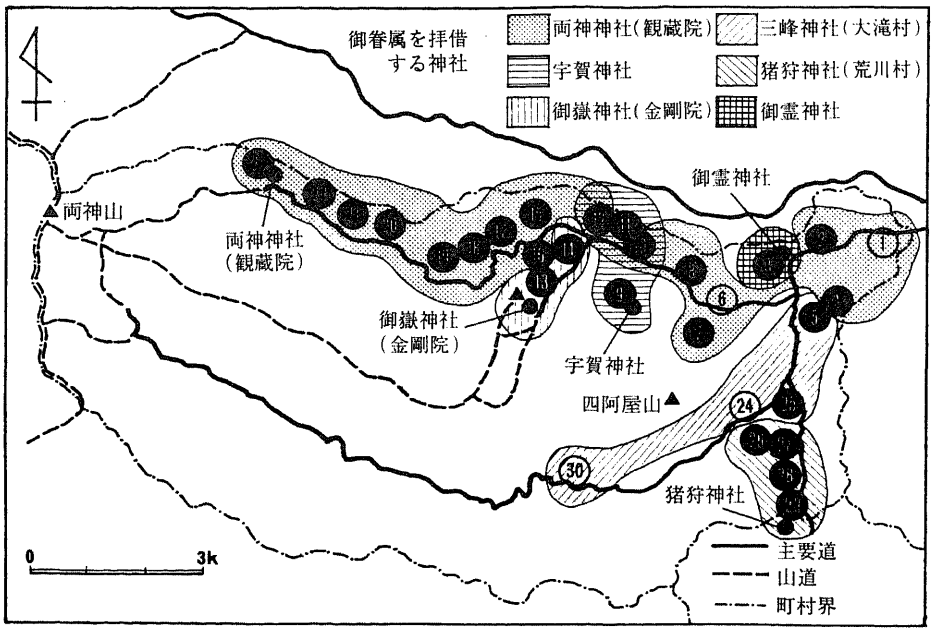
④両神講

両神村では，各集落ごとに一人講，五人講，七人講などの組織がみられ御眷属の貸出を受けている。平成元年(1989)に両神村において実施したアンケート調査[33]では，御眷属の貸出に関する回答45のうち，貸出をうけている分区は25，現在はないがかつては受けていた分区8，受けていない8，その他不明が4であった。講の形態や加入状況は集落ごとに異なるが，御眷属の貸出を受ける地域は，両神村全体に及ぶ（第7図）。また両神神社のみではなく，塩沢の宇賀神社，荒川村の猪狩神社，大滝村の三峰神社からも御眷属の貸出を受けている。薄川沿いの集落では，御嶽神社の氏子である浦島と今神を除き，ほとんどが両神神社から御眷属を受けている。一方，旧小森村の間庭・白沢・野沢では荒川村の猪狩神社から，薬師堂周辺の上宿および旧小森村の西平・原では三峰神社から御眷属を受けている家がある。これらの地区は近世より三峰修験の霞下にあった。こうした御眷属信仰のあり方は，近世における観蔵院と金剛院，あるいは三峰観音院の勢力圏を反映していると考えられる。

（2）金剛院の講中

現在活動のみられる金剛院の代表的な講中は，秩父神嶽講，小鹿野町の西秩父御嶽普寛講社，熊谷市の熊谷講，群馬県万場町の船子講，寄居町の牟礼講である。いずれも御嶽教の先達や御嶽信者を中心に組織されており，金剛院の講中と御嶽信仰とのつながりが強いこと示している。近世末，覚明・普寛行者の活躍により，各地に御嶽講社が組織され全国的規模で拡大していく。御嶽講社は，御嶽の山そのものを信仰の対象とし，講社を組織して御嶽の山神を祀る御嶽神社（御嶽座王権現）の参詣を行った。現在，金剛院にかかわる講中の多くは，おそらくこうした流れの中で成立し，金剛院順明および壽光の代に組織化がすすんだと考えられる。

明治期における金剛院の講中について把握するため，断片的ではあるが以下の史料にもとづきその分布を示した（第8図）。用いた史料は，明治5年(1872)「八日見講中下諏訪在控」，同年「八日見講佐久郡」，明治12年(1879)「普寛尊供養石



第７図　両神村内における御眷属拝借状況
（平成２年７月実施アンケート調査にもとづき作成）

注）a．黒丸は現在御眷属の拝借がある集落，白丸は現在はないが過去に拝借があった集落を示す。
b．アンケートの回答が「拝借していない」および「不明」の集落に関しては示していない。
c．拝借状況については集落ごとに異なる。
d．番号は集落名を示す。

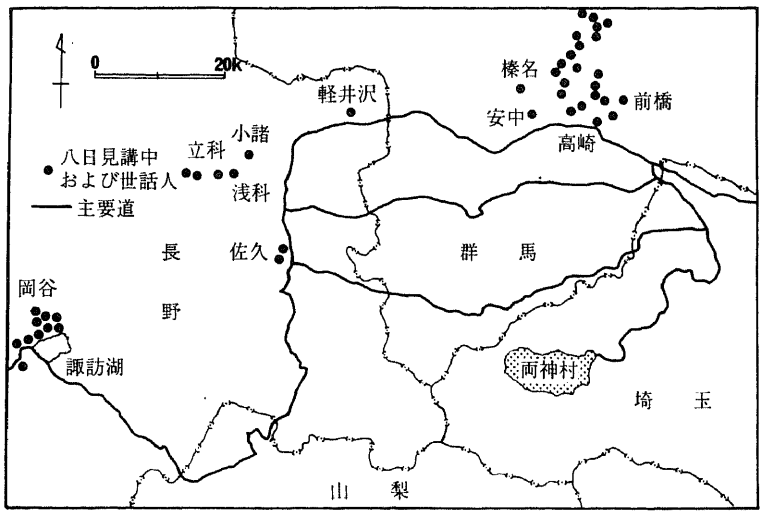
①小沢口　②上大塩野　③御霊　④大平戸　⑤上宿　⑥大平　⑦柏沢　⑧午房　⑨塩沢　⑩常木　⑪下和田　⑫竹ノ平　⑬浦島　⑭今神　⑮西平　⑯串脇　⑰沼里　⑱日向　⑲大神楽　⑳出原　㉑小倉　㉒集人　㉓日向大谷　㉔原沢　㉕原　㉖間庭　㉗下原　㉘白沢　㉙野沢　㉚西平

世話人控」の３点である。「八日見講中下諏訪在控」と「八日見講佐久郡」に記載のある町村は，それぞれ岡谷市周辺と佐久郡立科村・浅科村周辺に分布する。また「普寛尊供養石世話人控」によれば，普寛行者の供養石を奉納するための世話人は高崎・前橋・安中市および榛名町・箕郷町に広がっていた。このことは，上州から佐久を経て諏訪にいたる地域に，近世末から継続して金剛院の講中が存在していたことを示している。

①秩父神嶽（みたけ）講

金剛院の講中の中で最も規模が大きい。先達で神嶽講結成の発起人でもある萩原美喜夫氏は両神村出身であるが，現在は秩父市に在住している。本家がもともと薄平家と懇意であったため，知人を金剛院で祈禱を受けて治癒してもらったことが講中結成の契機となった。昭和35年(1960)に萩原氏が先達，その知人を講元として講を組織し，近所や知合いを中心に講員を増やしていった。現在，秩父市および荒川村を中心に構成員が約100名となるにいたった。

講中の組織は，先達１名，講元１名で，各地区ごとに世話人１名をおいている。主な活動は，毎年１月19日に役員と希望者５，６人で金剛院に代参して，講員のお札を受けてくることである。その日は，講員全体で親睦をかねて集まり直会をする。毎年約50名程度が集まり，一度参加したもの



第８図　明治前期の金剛院にかかわる講中の分布
（明治５年「八日見講中下諏訪在扣」「八日見講佐久郡」，明治12年「普寛尊供養石世話人扣」『金剛院文書』にもとづき作成）

は必ず次の年も参加しているという。１月末に役員慰労会および決算報告，11月末か12月に世話人の集まりをもち，来年の会費や代参者などを決める。萩原氏自身は祈禱や御座立てはやらないが，秩父御嶽神社の宮司を師匠とするいわゆる御嶽信仰の信者である。金剛院とのつながりが強いことは講創設の経緯からもうかがえるが，御眷属の貸出は受けておらず，両神山信仰とのつながりは希薄である。講としての活動は，信仰とともにお互いの親睦を深めていくことに意義をみいだしている。

②西秩父御嶽講普寛講社

西秩父御嶽講普寛講社は，名称から窺えるように，まさに御嶽信仰を基盤とする講社である。講の発起人であり先達もつとめる関口道蔵氏は，もともと母親のすすめで御嶽教に入信し，自宅に毎年訪れていた吉田町の御嶽行者に昭和21年(1946)弟子入りして修行した。20年ほど前までは，人に頼まれ病気なおしや狐つきの祈禱，蚕祈禱，家祈禱などをよく行っていた。知人に木曽御嶽に同行したいと頼まれたことがきっかけで，昭和51年(1976)に先達４人を含む６人で講社を組織した。近所同志や口込みで加入者をつのり，現在の講員は96名である。

主な活動は，５月の金剛院大祭への代参，および７月末か８月に２泊で行う木曽御嶽山登拝である。木曽御嶽山登拝には毎年25人前後が参加している。順路としては，鬼石町から佐久を経て下諏訪に入り諏訪大社を参拝したのち，木曽路を通って木曾福島の大本庁を参拝，その後清滝で水行をすませ八海山参拝，田の原山荘にて第一日目の宿泊となる。夜中の２時頃起床し３時に出発，御嶽山に登拝する。お昼には下山し，その日は上諏訪で下山祝いを行う。この御嶽山登拝には，薄平宮司や大滝村の普寛神社宮司も参加することがある。

この講社も秩父神嶽講と同様に御嶽信仰の性格が非常に強い。講中としては金剛院の御眷属の貸出しを受けていないが，なかには個人的に三峰神社の御眷属を受けている講員もいる。

③熊谷普寛講

この講中を率いる先達薄平正氏は現御嶽神社宮司の薄平寿徳氏の実弟で，昭和49年(1947)に熊谷に御嶽教金剛院布教所を設立した。20年ほど前から御嶽信仰にかかわり，本庄市の普寛堂で修行を積んで先達となった。現在この布教所にかかわる

信徒は300名ほどいる。金剛院とは直接のつながりをもっておらず，講中としては御眷属の貸出も受けていない。

④牟礼講

寄居町牟礼を中心に現在約39名で構成されており，御嶽信仰の先達6名と地区ごとに世話人をおく。地区の内訳は，寄居町牟礼29名，今市6名，赤浜6名，富田2名，花園町原宿1名，および嵐山町古里2名となっている。先達の1人である大島一郎氏は，40代の頃より祝詞などをよむようになったが，63歳で知人から御嶽信仰の教えを受け入信した。他の先達と観蔵院に泊まった夜「御眷属の声を聞いた」のを契機として両神山に登拝し行を行うようになった。

講中の主な活動は，2月節分祭と5月大祭に10名程度が金剛院に代参し，御眷属の貸出を受けること，また先達を中心に病気直しの祈禱や御座立て，さまざまな行を行うことである。先達は，4・10月例祭，9月講習会，11月エビス祭り・星祭りに普寛堂を訪れ，また年1度の木曽御嶽山登拝を行うなど，御嶽行者として活発に活動している。牟礼講成立の時期については明らかではないが，構成員の地縁的な関係が強いこと，および火難・盗難避けとして御眷属の貸出を以前から受けていることなどから，近世末にまで遡ると推測される。しかし，近年の活動状況はまさに御嶽教の影響が強い。

⑤船子講

船子講は，群馬県万場町元船子を中心に組織されている。現在も元船子の大半と近隣集落の約29戸が加入し，金剛院から御眷属の貸出を受けている。毎年，くじ引きで4人が当番となり代参を行う。講の形をとるのは昭和30年代だが，それ以前から金剛院とのつながりはあった。群馬県中里村の「神道様」と呼ばれた御嶽教の行者が頻繁に船子を訪れていた。この行者は，たびたび金剛院を訪れ，両神山でも修行していた。この行者は家祈禱や病気治しとともに，病弱な子供を金剛院へ連れてゆき本尊の守り子にしてもらう，いわゆる「取り子」なども行っていた。

元船子では現在も大半の家で御眷属を火難・盗難よけとして玄関先に祀っている。御眷属を祀っておくと，こんにゃくを盗まれることがないともいわれる。これは御眷属信仰のあり方がその地域の生活や生業に応じて多様化した一例であろう。

Ⅵ　おわりに

本報告は，両神修験の展開と変質の過程を明らかにするため，近世以降の両神修験の存在形態および活動内容について考察を行った。

両神修験の中心的存在であった当山派・観蔵院と本山派・金剛院は，少なくとも近世中期には両神山を背景として配下の百姓山伏をしたがえ活動していた。観蔵院は，日向大谷の両神山主要参詣道の入口に位置し，一方の金剛院は浦島の最奥部に位置していた。両修験ともに山頂付近に本社を配し，両神山の里宮として，かつ山岳修行の先達として活動していた。さらに両神山を訪れる行者の宿坊をも兼ね，いわば御師的な活動を主としてさまざまな機能を果たしていたようである。

近世村落社会の中で両神修験が果たした役割に関して，本稿では村・家・個人の3つのレベルにわけて考察を行った。修験者は村行事の中でも，とくに雨ごい・虫送り・疫病よけなどの除災にかかわる分野で活躍していた。同時に，修験者は一定地域を廻村して勧化・布教を行い，祈禱やおはらいによって庶民の生産や生活の守護といった要請にも答えていた。各家を廻檀して行う春祈禱や蚕祈禱は，山間の畑作地帯や養蚕地帯の卓越する秩父地域おいては近年までよく行われていた。また近世末における両神山への参詣者の増加は，少なからず村へも経済的利益を与えたようである。参詣者の増加は，観蔵院や金剛院が各地を廻檀して布教・勧化を行った結果と考えられる。観蔵院は両神村内をはじめ秩父盆地から寄居を経て，本庄宿，熊谷宿，松山宿にいたる荒川流域を主な活動範囲としていた。一方，金剛院は寛政期以降，普寛行者との関わりから御嶽信仰の影響を強く受けたため，近隣地域よりもむしろ上州・信州を中

心に活動を展開していった。両修験に関わる講中の分布は，明らかに活動範囲の差異を反映していた。

近世以来，観蔵院や金剛院と講中とを結びつけてきた最も大きな要素は御眷属の貸出しであった。御眷属信仰は，火難・盗難・四足よけといった利益が基本であったが，養蚕守護など地域の生業形態や庶民の要請によって多様化していた。庶民の修験者に対する要請は，日常生活や人間関係，医療にまで及んでいた。とくに両神村では第二次大戦後も狐つきなどが珍しくなかったが，憑きものおとしに関しては絶対的に修験者の験力が期待されていた。

明治元年の神仏分離令や明治5年の修験道廃止令は，両神修験にとっても大きな衝撃であったに違いない。観蔵院は八日見神社に，金剛院は御嶽神社に復飾し，形式的には修験道的性格が薄れたようにもみえる。しかし，観蔵院や金剛院あるいは講中の活動は明治以降も継承され，実質的にはそれ以降も両神山を基盤とする修験活動が展開していった。そればかりか両神山内への石造物の奉納状況や，金剛院壽光の積極的な動きを見る限り，両神修験は御嶽信仰という要素を導入しつつ新たな局面を迎えていた。

近世末には金剛院壽光によって浦島からの参詣道が開拓され，また周辺住民によって丁目石が奉納されるなど，両神山の山岳霊場としての整備がすすんだ。このことは両神山が特定の修験者だけではなく，一般の講中や信者によりひらかれたものとなったことを示している。

現在，観蔵院および金剛院の講中は，例大祭への参加や御眷属の貸出によって両神社と結びついている。しかし昭和40年代以降，両神山に修行を目的として訪れる行者や講中は，小関講を除き，ほとんどみられなくなった。小関講の先達小関益男氏は，両神山の最後の行者といわれている。

聞き取りによれば，昭和30年代から40年代にかけては両神村においても生業形態や生活様式の変化が顕著にみられた。昭和30年代までは，麦・大豆・小豆などを中心とする焼畑農業や炭焼き，紙漉，養蚕経営などが生業の中心であった。しかし昭和40年代以降，焼畑は山林経営に代わり，炭焼きや紙漉などは行われなくなり，兼業化の進展も著しい。こうした地域社会の変化とほぼ平行して，両神修験の活動や講中のあり方も変化してきたといえる。

両神修験の展開と変質の過程は，山間の畑作卓越地域あるいは過疎化地域といった性格を有する両神村の地域的特色と何らかのかたちで結びつくものと考えられる。あるいは両神修験がかかわってきた地域的広がりが何を意味するものかは，今後，地域社会と修験者との関係をより具体的に明らかにするためにも重要な課題となるであろう。

付　記

本稿を作成するにあたり，現地調査に際して，両神村教育委員会の高橋稔氏・久保彰氏・総務課高橋豊氏にはお忙しい中，終始御助言・御協力を賜わりました。また両神村役場税務課，秩父市立図書館，三峰神社，両神村の皆様には，聞き取り調査および資料収集にあたり大変お世話になりました。とりわけ両神村浦島の薄平寿徳氏ならびに日向大谷の鈴木まる子氏には，貴重な資料を提供していただき，数度にわたる聞き取り調査にも多大なるご協力をいただきました。記して厚くお礼申しあげます。
さらに筑波大学歴史・人類学系大濱徹也先生には終始暖かい御指導をいただき，筑波大学比較文化学類大谷章史，人文学類橋本直美，山本秀和の各氏には平成元・2年度の歴史地理学実習において，資料調査および資料整理にご協力いただきました。ここに記して深く感謝申し上げます。

注

1）両神村役場(1986)：『統計　りょうかみ』，21ページ。昭和61年の地目面積は，田22.7ha，畑356.3ha，宅地48.3ha，山林2320.6ha，原野16.0ha，雑種地12.1ha，その他4270.0haで，水田はわずか0.3％であった。
2）埼玉県文書館(1984)：『埼玉県寺院聖教文書遺品調査報告書Ⅱ』(解説　史料編)，53ページ。
3）千島　寿(1979)：両神山の信仰，『日光山と関東の修験道』山岳宗教史総書8，名著出版。

4）両神村史編纂委員会(1989)：『両神山』りょうかみ双書3，第一法規出版。
5）金剛院文書，両神村浦島薄平家所蔵，一部は埼玉県文書館にマイクロ写真で保存されている。観蔵院文書，両神村役場村史編纂室所蔵。
6）前掲5），339～349。
7）山名については次のような諸説がある。
①両神山　両神とはすなはちイザナギ・イザナミの二神をさし，日本武尊が東征の際にまつった。
②八日見山
・日本武尊東征の際，郡内行幸中8日間この山が見えた，あるいは夷賊追討を祈願して筑波山に登った際8日間この山が見えた。
・御朱雀院の時代，一位道人が筑波山に参籠中，夢に童子が現れ，そのお告げにより白狼に従ってゆくと，8日目にしてこの山にたどり着いた。
③卯月八日山入り　三峰山，武甲山に共通する，卯月八日山入りの習俗から。
④ヤオガミ　龍神信仰とのかかわりから，「ヤ」は八，「オガミ」は大蛇で龍王をさす。
8）斉藤広一(1988)：秩父地方におけるヤマトタケルノミコトの伝説，秩父民俗，13。
9）飯塚　好(1989)：お犬さま信仰とその周辺－秩父地方を中心として－，埼玉県立博物館紀要，15。
10）内務省編地理局(1879)：『新編武蔵風土記稿』（秩父郡），998～1001。
11）前掲10)。
12）「八日見山両神神宮略縁起」（年不詳），観蔵院文書，両神村役場村史編纂室所蔵。内容から作成は近世末と考えられるが，最後に「別當観蔵院　現住再版之」とあることから，本縁起あるいは同様の縁起が既に存在していたと考えられる。
13）「永代講中帳」天保13年（1842），金剛院文書，薄平家所蔵。
14）「両神山護摩講中帳」（年不詳），観蔵院文書，両神村役場村史編纂室所蔵。
作成年代は不明だが，作成者が「金生寺」とあることから安政期～明治5年の間に両天によって作成されたと考えられる。
15）平成元年度の両神村における聞き取り調査で，実際にお犬様の姿を見たり声を聞いた経験について聞くことができた。「夜中の峠道で山犬にとりかこまれた」，「お犬様の存在を信じない若者が山犬に襲われそうになった」といった類の伝承も残っている。
16）羽塚孝和(1979)：武州本山派大先達・山本坊について，『日光山と関東の修験道』（山岳宗教史総書8），名著出版，366ページ。
17）当山派の階級は，上から法印・大越家・阿闍梨・螺緒・三僧祇・二僧祇・一僧祇・新客となる。階級は，本来大峰山修行の回数によって決定されたが，近世中期以降は修験道の世俗化がすすみ，金銭によって階級を得ることが一般的に行われるようになった。
18）金剛院文書に，慶応2年金剛院が峰通りの道を参詣道として使用したい旨，道筋にあたる地主9名宛に提出した史料が残っている。
19）金剛院文書，永禄11年没の黒沢左京太夫影信から現宮司の薄平寿徳氏まで，29代にわたって院号および氏名と没年の記載がある。
20）薄平　正(1979)：『金剛院の由来に関する略記』，3ページ。
21）田中武治家所蔵，文化2年は大福院宛に権大僧都職・三僧祇職が，嘉永元年には三光院宛に院号職・錦地職が発給されていた。
22）田中武治家所蔵　作成年代は不明，寺の過去帳をうつしたものと思われる。
23）三峰神社社務所(1984)：『三峰神社史料集　第一巻』，41ページ。
24）本山派修験宗本庁聖護院文書　天保3年(1833)。
25）観蔵院文書，両神村役場村史編纂室所蔵。
26）両神村史編纂委員会編(1988)：『両神村史　史料編2近世』，209～329，『両神村史　史料編3近世・近代』，317～382。「村入用夫銭帳」（出浦家文書）は安永3年（1774）から明治3年（1870）にかけて残存している。
27）前掲4），110～117によれば，白井差の昇龍之滝の「お水もらい」に関しては，大正12年と昭和4年の不動明王御水料の控えが残っている。
28）金剛院文書，両神村浦島薄平家所蔵。
29）荻野壽美子(1989)両神山信仰に関する歴史地理学的研究，國學院大学卒業論文。荻野氏の「義経兵法虎之巻相傳」の分析によれば，法の内容は人間関係が58％，兵法関係が25％，医薬関係が15％，不明が2％であった。
30）明治5年(1872)に政府が女性の登山参詣を認めるまで，ほとんどの山岳霊場では女人禁制を守っていた。女人禁制を破って登拝した女性や信仰心の厚い女性が石と化す巫子石あるいは姥石の伝承は，大峰山をはじめとして各地に残っている。
31）柏沢の神楽は，明治3年(1870)に金剛院の薄平壽光が金剛院付属の神楽を創設するため，児玉郡仁手村（現・本庄市仁手）から神楽教師を招き柏沢の数名に伝習させたのが始まりといわれている。
32）前掲4），85～86。
33）平成元年(1988)7月両神村において13区長および61分区長へのアンケート調査を実施（回収率60％）。